

都心商業地域におけるパブリック・イメージの解析

京都大学工学部 正 員 天野 光三
 京都大学工学部 正 員 小谷 通泰
 京都大学大学院 学生員 久郷 幸夫

1. はじめに — 本研究は都心商業地域を対象にアンケート調査を行なって、人々が共通に抱いているイメージをパブリックイメージとしてできる限り定量的に抽出する方法を提案するとともに、ケーススタディとして京都市の中心的繁華街である河原町境界を対象に実証的分析を試みるものである。

2. 調査の方法 — 実施したアンケート調査は以下のようなものである。まず被験者に対象地域の概略地図を見せ、次にその地域内において想起されるエレメント（建物・店舗・他の目標物）を1～20の番号を付した記入欄に想起順に列挙させる。ただし、調査を実施するにあたっては、過度の思考による再生を避けなるべく自由な想起作用の中からイメージを抽出するために、①想起の際に概略地図を参考にしない。②解答時間は5分以内。③記入欄はすべてを埋める必要はない、の3つを注意事項として与えた。なお被験者は、男91名、女91名の計182名である。

3. 対象地域におけるイメージの現況分析 — 上述の調査結果から、①個々のエレメントの想起頻度（イメージ量）に関する情報、②エレメントの想起順序に関する情報を得ることができた。まず、イメージ量に関する集計結果を図1、図2に示す。図1はエレメントが想起された確率をイメージ量順位に従ってグラフ化したものであり、全被験者の場合のグラフに男女別に求めた想起確率も重ねて表示してある。図2は想起確率の大きさを円の半径で表わし、イメージされやすいエレメントの対象地域内での空間的分布の様子を示したものである。これらの図から以下の事柄が導かれる。1)各被験者の抱くイメージは全体的にみると非常に分散しているように思われるが、特定の少数エレメント（t, h, b, sh, m等）に関しては高い集中がみられる。2)個々のエレメントのイメージされやすさは男女によって多少異なる。3)地域内でイメージ集中率の高いエレメントは中心的街路である河原町通に多く、それらはいくつかの共通性（エレメントの大きさ、業種等）を持っている。次に図3はエレメントしるし番号までに想起された確率をイメージ量順

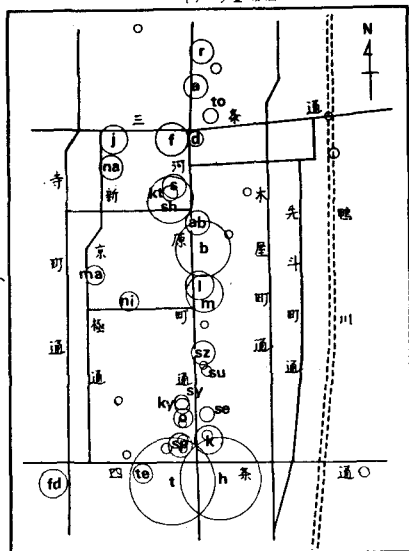
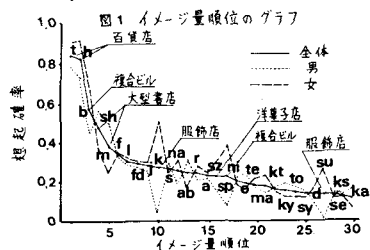


図2 地域内におけるイメージの分布

Amano Kozo Odani Michiyasu Kugo Yukio

位が10位までのものについてグラフ化したものである。この図によるとイメージ量順位が上位のものほどグラフが凸型で、下位になるにつれてグラフが傾きの小さい直線の傾向を帯びていることがわかる。これはイメージ量の大きいエレメントが被験者の一連の想起プロセスの中でも早い段階で想起される確率が高いことを表わし、イメージがパブリックなものからパーソナルなものへ移行していく想起の構造を端的に示すものである。

4. イメージの核の抽出 — 想起プロセスの中において、あるエレメントE_iの次にエレメントE_jが想起される過程をイメージフローと称し、その頻度をF_{ij}と定義する。いま、このようなイメージ連鎖の要因を探るために、G_{ij} = F_{ij} + F_{ji}なる指標G_{ij}をエレメント間の親近性の尺度として、イメージ量順位が50位以内のエレメントを対象にクラスター分析を行なった。その結果、50のエレメントから有意と思われる3グループが抽出され、そのうちの3つをイメージフローF_{ij}の値や他の情報とともに図4に示す。各グループに属するエレメントを調べてみると、グループの構成要因としては種々のものが考えられるが、①エレメント間の空間的距離の近さ、②エレメント間の業種の類似性がその主たる要因であると言えよう。図5は各グループに属するエレメントについてグループ単位の総イメージ量、平均イメージ量を求めたもので、group-i~iiiはこの順にエレメント間のつながりが強くなっている。この図から次の事柄が推論される。1) group-i~iiiは他のグループに比べて総イメージ量が非常に大きい。2) group-i~iiiの平均イメージ量は他に比べて大きく、よってこれらのグループは相対的にイメージしやすいエレメントから構成されている。3) 各グループの平均イメージ量は遞減傾向にあり、イメージ量順位と想起順位との想関関係から番号の若いグループに属するエレメントほど早い段階で想起される確率が高い。以上の事柄から、group-i~iiiは多くの入々に早い段階で想起される確率が高く、また比較的主として想い出されやすい対象地域のイメージ構造を支える“核”的存在であることが結論として得られた。

5. おわりに — 本報では対象地域におけるパブリックイメージを、イメージ再生量やイメージフロー値を用いて定量的に把握する方法について述べた。また、イメージ再生量とエレメントの物理環境の関連についても、数量化理論I類による分析¹⁾を行なったので、その結果に関して講演時に発表する予定である。 1) 志本英樹「街のイメージ構造

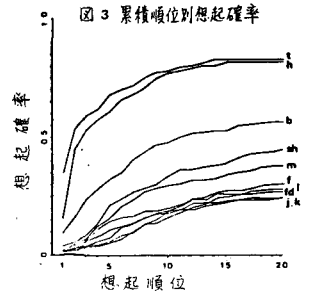


図4 グループI~IIIとイメージフロー

